**＜包越＞ :＜身心の変容と神の国への（assumption）＞**

**フランス霊性神学史の小窓　聖ベルナール、パスカル、ペギー**

　　　　　　　　　　　　　　　（レジュメ）

　　　　　　　　　　　　　　２０１７年１１月２０日（月）　第６１回心身変容技法研究会

**檜垣 樹理**

**構成**

**はじめに　　assumptionと＜包越＞をめぐる問いかけ**

1. **＜神の似姿＞として＜創造＞された人間と、キリストの＜受肉＞**

**—教父から　聖ベルナールまでの中世—**

1. **１７世紀の恩寵論争とパスカルの「三つの秩序」 :身心、人間性と神性の乖離**
2. **ペギーの神秘ビジョン　＜創造＞と＜受肉＞の再発見 :神の国への身心の＜包越＞**

**終わりに　　holisticの行き先**

**はじめに　導入と問いかけ**

　　　　　　　　　　「フランスにおける身心変容技法の変遷史」へ

**１　「小窓」と大空**

**小さく切り取られた窓であっても、そこから大空全体の動きを映し出すことがある**

**ペギーCharles Péguy（1897-1914）とパスカルBlaise Pascal(**1623-1662)

**の接点が映し出す、西洋キリスト教史の変換点**

**→中世の視点を入れて捉え直す**

**１２世紀の聖ベルナール Bernard de Clairvaux（1090-1153）、**

**ギリシャ教父とラテン教父の融合をみる「最後の教父」(**schisme 1054)

**１３世紀以降のスコラ哲学の発展によって取り残されたもの**

**理性主義の結果として、失われた繫り：身心を、人間と神を結ぶ有機的なつながり**

日本宗教とキリスト教の対話につながる＜超越と内在＞のビジョン

**２　« assumption (assomption) » の意味**

**assomption** (***assumptio*** **引き受ける、自分のものとする)、**

　　　　　　　　　 Hypostase (Lévinas) assumer l’existence

　＿より大きな包括的なものが、その身のうちに、意思と行動を伴いながら、

対象を丸ごと＜dans son intégrité＞迎え引き入れる。＿

聖母の被昇天　　心身、人間丸ごとそっくりそのまま天に迎え入れられる

　　　　　　　　心身、人間の全体性の救いの終末的ビジョン、神の国

　　≠　Ascension (*ascensio*  上昇する)　（キリストの昇天）

**３　＜包越＞**　　超越が人間丸ごと内包しながら超越させる

　　人間が超越との関係の中で内と外、心身、天と地の分裂を癒されながら全体性と一致を見出していくプロセス

　　（言語の持つ力と限界、世界が「創られた」という西洋と、「生まれた」という日本

西洋的な他動詞〔主語の主体性と超越、しかし内在なしの＜外から＞だけに思えるリスク、受動、受容性としての交わり体験、生成を言い表すためには再帰動詞〕、

日本的な自動詞〔主語にある内在的な命、自発性、しかし超越なしの＜中からだけ＞に思えるリスク、主体的な責任、他者との出会いと回心、交わりが曖昧〕、中動態は？）

**４　見えるものと見えないもの（感覚で捉らえる存在と、そうでない存在）**

理性が、宗教体験の本質にある超越と内在を、上昇と下降を、受動と能動を、一と多を、普遍的なものと特殊、個別的なものを、自然と超自然を、両者の一致として同時に考えることの困難、

実践者としての神秘家のビジョンと、哲学を出発点にする組織神学の乖離の危険性

「恩寵は自然を破壊せず、それを完成させる」(トマス・アキナス)

両極のどちらなのかという問いかけをしてしまうなら、同時にその両方であり両方でない、両方の狭間に垣間見る全てを包越する充満としか言えなくなる

それを間接的な言葉で表現することの困難さ、表面的な(知性だけの)追従者が両極の片方だけ（自分に都合の良い方）を取捨選択する現象の繰り返しと、その結果としての反動の思想史

**５　哲学とキリスト教の出会い　そしてその課題**

**キリスト教の特徴　　　三位一体の神秘**

　—　神と人間を、天地を、心身を結ぶ＜受肉(Incarnation)＞と、  
　　ダイナミックな神のいのちの息吹である＜聖霊（Esprit Saint＞）

　　両者の持つ切り離すことのできない超越性と内在性—

**西洋哲学のベース**

感性で捉えることのできるものを超越した他次元にある静的な本質としてのイデア

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（プラトン）

感覚で捉えられるものに、動的な因果関係を観察し、同一平面で見出される本質としての純粋形相

　　　　　　　　　　　（アリストテレス）

このギリシャ哲学のベースに、＜受肉＞を特徴とするキリスト教のいのちのダイナミズムが出会った時の力と困難

−西欧におけるキリスト教の文化的受肉（inculturation）の問題　が基礎にある。

−それに加えて科学技術革命、啓蒙主義、産業革命がもたらしたバイアス

＜受肉＞と＜聖霊によるいのち、人間の神化（divinisation）を実現する恩寵＞

神（ロゴス/み言葉）が人（肉）となった。

「み言葉は人間となり、われわれの間に住むようになった」(Jn.1.14)

「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心の中で溢れ出ているからです。」(Rm 5,5)

　リヨンのエイレナイオス（聖イレネオ Irenaeus, saint Irénée） (130-202)

　「神の栄光は生きている人間であり、人間のいのちは神を見ることである」 (『異端反駁』4, 20:7).

　「人間が神（の子）となるために、神は人間となった」（同上3, 19, 1）

「世界を外から支配する超越神（西田幾多郎『善の研究』１９１１）？」

＜地上の国＞と＜神の国＞

キリスト教における人間と＜時間＞は、＜永遠＞の＜今＞のうちに、＜創造＞から＜受肉と贖罪＞を経て、＜終末＞にいたる、一つの救いの歴史の流れうちに位置付けられている。

「キリストが全てにおいて全てになる」(1 Co. 15:28)

神の愛の秩序、ただ外的な力の行使の結果ではなく、人間性のうちに刻み込まれた神への希求を満たす充満と完成

**中世まで、**

*人間論*は＜受肉した神＞である*キリスト論*に基礎付けられている

感覚で捉らえる人間の現実とそれを超える神との間に、超越と内在的結合が同時にある

どちらかの全否定でもなければ　それぞれが独立したものとして切り離されたり、同一平面で競合的力関係をもつものでもない。

神丸ごとと人間丸ごとが交わる。

**１７世紀以降**

　　人間の自由意志と神の恩寵、自然と恩寵、が、両者の間にある隔絶された超越が強調されながらも、同一平面で交わることのない力関係として把握されるようになる。

ますます強調される傾向：静的に固定された概念としての＜自然＞、神なき＜自然＞の独立と、＜外側＞からの働きかけとしての＜恩寵＞。  
計量化され得るものだけを対象とし、抽象して支配する知性による普遍性。

普遍性はどこにあるのか。普遍的存在と個別的実体の関係は？普遍性を知的レベルの抽象概念と同一視する危険　＜知＞と＜権力＞　１８世紀以来続く　知性の一元的専制的支配 ペギーの近代批判

抽象の影に見失われた具体的なもの意味、知性の影に見失われた身体の意味、そして、論理分析に対する直感、神なき人間性に対する、人間丸ごとホーリスティックな人間理解を求める動き

多様性の中の一致　人間性＞どこに、どのレベルで多様性と一致を求めるのか　現代的問題

1. **＜神の似姿＞として創造された人間と、キリストの＜受肉＞  
   　　　　—教父から　聖ベルナールまで—**

**1. *assumption*の（カトリックにおける）３つの用法とヴィジョン**

**assomption (*assumptio* 　身に引き受ける、自分のものとする）**

**≠　Ascension (*ascensio*  上昇する)　（キリストの昇天）**

**＃１　キリストの受肉（Incarnation)（神が人間性をその身に引き受けた）**

**人性と神性、人としての意思と神としての意思の一致**

**（どちらかがどちらかに吸収・消滅されない、混同されることのない結合）**

**＃２　l’assomption du charnel par la charité  
＜肉なるもの＞(*carnalis*)とその充満が、＜霊なるもの＞（*spiritualis*）:神の愛（caritas）に引き受けられ、本来の召命に高められ完成される、命のダイナミズム**

**（＜肉なるもの＞と＜霊なるもの＞の２つの語のそれぞれが持つ両義性の問題）**

**＃３聖母被昇天（聖母が魂も体も共に天に移された）（救いの人間の終末的希望）**

**＃１（キリストの受肉）がベースにあるかどうかによって、＃２の霊性・人間論が導きだされる**

**2. 本稿の焦点と問いかけ**

　　　キリストの受肉をまったき神でありまったき人間であると捉える＜神人一体論（le théandrisme）＞は、教父から１３世紀までの神学霊性そして人間論の基礎となっていた。

　　　このキリストの神人一体論が衰退した時期　（14世紀から１５世紀）

　　　１７世紀フランスの恩寵論争の失敗はそのキリスト論による。キリストの神人一体論が衰退したことで失われた一致を探し求める霊性。(Marie-Joseph Le Guillou, Simon Icard) \*引用1,2

（一致＞人間と神、信仰と行為、効果とその原因）

　　１７世紀の霊性神学は、純粋さと一致、普遍性を内面（心）に求めながら、一方、心身の一致については、ある亀裂が生まれたのではないか？

　　その亀裂の一致を求める動きが２０世紀の神学と哲学の根底にあるのではないか？

　　→聖ベルナール（１２世紀）、パスカルとポール・ロワイヤル（１７世紀）、ペギーとその周辺（２０世紀）の例を見ることによって、

1. この＜キリストの受肉＞が中世までに基礎付けたもの、
2. 近代におけるその衰退がもたらした課題、
3. ２０世紀初頭にペギーが＜受肉＞の再発見をしたことの意味を考えたい。

**3.３つの時：創造と終末の中間にいる人間**

**創造＋原罪／受肉と贖罪から恩寵へ／栄光（終末へ）**

**終末(eschatologie)に向かう恩寵のダイナミズム**

**下降と上昇　超越と内在　見えるものと見えないもの**

この恩寵のダイナミズムの中で、身体、感覚で捉えられるもの、人間性の位置付けは？

**聖パウロのビジョン**

**\*＜かの時＞　愛、完成の時、部分的なものは廃る(I Co. 13, 8-12)**

**神の顔を直接観るその時、＜神に似たものとなる＞(IJn.** 3:2)

**\*栄光から栄光への変えられていく。(ⅡCo.3:16-18) もうすでに⇄未だ**

**\*神の国　神の愛の秩序の完成と　＜キリストが全てにおいて全てになる＞(ICo. 1, 28)**

**\*十字架の言葉　（I Co.1,23-25）**

**\*霊と文字 (II Co.3,6, 17)**

**\*ヘブライ的人間観と霊と肉　＜肉＞の両義性**

**肉　魂　霊 ３つの観点から見た人間の全体　(Th.5,23)  
　（ギリシャ的思考　人間を分ける３つの部分ではない）**

**\*まず体、そして霊　（ICo., 15, 44-45）**

**\*良きサマリア人 （Luc.**10, 25-37）**自己愛と隣人愛、神の愛**,

**\*ぶどうの木と枝（Jn.**15：5）**有機的イメージ　永遠の命の源、基が神にある**

**（キリストを通して、聖霊によって、神へとつながる交わりcommunion）**

**＜受肉＞　人となった神 (Jn.1,14)　キリストのうちに、人間性と神性が一致している。**

**人間と神を隔てる距離（創造主と被造物、罪による離反）にもかかわらず、人間はキリストに結ばれることによって、神と結ばれることが可能となる。**

**＜創造＞と＜原罪＞の位置づけによって、人間性と神の恩寵の関係が異なって議論される。**

**キリストの＜受肉＞を＜創造＞の完成と見るか、＜原罪＞の＜贖罪＞と見るか、  
両方のうちどちらかだけを強調する場合の問題点。**

**公会議**

**カルケドン公会議（４５１）キリストに人性と神性の両方があることを確認**

ラテラン公会議（６４９）カルケドン公会議の延長線上で、キリストに人間としての意思と神としての意志があり、キリストのペルソナのうちに一致していることを確認

**4 キリスト論に基礎付けられた人間論**

**創世記　「神の似姿に創造された人間」 ad imaginem (Gn** 1,28)

**(Vulgata訳** faciamus hominem ad imaginem et similitudinem nostram)

　　　　　　　　　　　（ギリシャ語ラテン語にあるetは付け加え adはヘブライ語ではin,intoに近い前置詞）

　　　　　　　　　　　　　　(King James, American Standard : « in our image, after our likeness »)

**（神の像として、似姿に向けて、創造された　à l’image et à la ressemblance）**

**神の型取りを持ったものとして、神に向けて（神に似るように）作られた。**

**静的なものではなく動的なもの**

問い1 **＜原罪＞によって、自由意志によって神に背を向けた人間は、神の像（image）と**

**似姿を失ったが、神に向かい神の恵みの命に生きる招きと素質（capacité）としての神の型取り、像(image)は刻まれている**

**（orあるいは自由意志もなく、型取りの跡も見られない？）**

問い2 **神の像に従って創造された人間は、「見えない神を映し出す像（*image）*であるキリスト」(Col.1. 15)を映し出す像（l’image de l’Image 像のモデルはロゴス）**

**「全てがそれによって造られ」「見えない神の像（*image）*であるキリスト」(Col.1. 15)が受肉と贖罪によって人間のうちに刻まれた似姿を完成し、そこに、贖われた人間が恵みによって参加する。**

**(or 神の像を失った人間の悲惨を超える神の偉大さがキリストの受肉と贖罪によって現れ、人間は失った空虚の中に恩寵を受ける？)**

**問い３　　神の栄光は、現世の見える世界に内在するのか？or内在しないのか？**

**美学と神学の関係（感覚で捉らえるものは、神へと至る道具なのか?or妨害なのか？）**

**（中世は前者positive、１７世紀は後者orの　negativeに近づく、現代は　？）**

**＜栄光＞＜神の国＞終末にしか完成されない進行形**

〈つねに―すでに〉と〈いまだ―ない〉の間にある緊張関係とダイナミスム

**不完全なものが完全なもの(になるよう)に向けて造られた**

**5.＜神の似姿＞に造られた人間の＜創造＞、キリストの＜受肉＞と救い、＜終末＞の完成**

**教父らの解釈　聖ベルナールの例**

**＿＜原罪＞によって、＜神に似た者となっていく＞指向性は失われ、＜神の似姿から遠ざかる＞（相違dissemblance）流刑の地に生きる事になったが、人間に刻まれた＜神の像＞は失われなかった。どんなに惨めであっても、人間性、自由意志のうちに刻まれた＜神化される素質＞(capable de Dieu)は、すべての人間が持ち続ける。キリストの受肉と贖罪によって、「神の似姿に創造された人間」が本来の召命へと完成された。キリストは完全に（丸ごと）真の人間であり、かつ完全（丸ごと）に真の神であった。キリストの人性と神性の一致による救いに人間が参加する恵みは、創造の恵みを完成させる。**

**＿聖ベルナールによる、謙遜と愛の＜段階＞（degrés）**

聖ベルナールの謙遜は、自己愛や人間性の否定ではなく、終末の完成に向かっていく神のいのちのダイナミックな一つの動きの中に位置付けられている

最初の段階　　神の内在的超越的いのちの発展の基礎であり、高次の段階は低次の段階を内包しつつ完成させる。

１　自分自身のために自分を愛する（しかし、隣人愛なしに自己を愛することができず、神の愛なしに隣人を愛することができない）→２　自分の利益のために神を愛する→３　神のために神を愛する→４　神のためにしか自分を愛さない　　  
 （Saint Bernard, *Traité de l’amour de Dieu*, ch.VIII-XI）

＜神が全てにおいて全てになる＞　神のみ旨が人間によって、人間のうちに実現

＜人と神が、どちらが消えることなく、結ばれ、丸ごと変容する＞婚姻へ  
ぶどう酒の中に入れられた一滴の水、燃える火の中に包まれた鉄のかけら、全部光に照らされた空気　　　体の復活によって完成される至福　　　\*引用３

**人間性に外付けされるものがあるとすれば、それは、＜悪＞であって、＜恩寵ではない＞。**

**神の愛と恩寵は人間性を丸ごと引き受けつつ、神と人間が差異を排することなく結ばれる完成に導く**

**受肉と恩寵によって排除されるのは、モデルと像の間にある距離としての罪**

\*引用４、５

**→　聖ベルナールにおいて、人間性は、神性によって内包されつつ超越する、assomptionの視点から捉えられている。**

**（近代に見られるような、独立した自然、人間性に、外付けされる神の恩寵という把握とは全く異質である。）**\*引用6

**＿最後の教父としての聖ベルナール）**

**受肉による神化（divinisation）のビジョンが中心にあった。  
「人間が神になるために、神は人間となった」**

**ギリシャ教父とラテン教父の調和**

**（後世に＜主義＞として固定化されたアウグスチヌス[354-430]一辺倒ではない）**

**１２世紀  東方の教父の影響もあり、アウグスチヌスが、より広いよりバランスの取れた視野の中に位置づけられていた。**

**告白者聖マクシモス** ([580](https://fr.wikipedia.org/wiki/580" \o "580)-[662](https://fr.wikipedia.org/wiki/662))  
**「（受肉したみ言葉—ロゴスによって）引き受けられなかったもの（**« ce qui n’a pas été assumé）は癒されなかった。神と結ばれたものが救われのだ」\*引用7

**スコラ哲学の芽生え、アベラールの理知主義に反対した聖ベルナール**

1. **１７世紀の恩寵論争とパスカルの「三つの秩序」**

**１　歴史の変遷と時代背景　（スライド「目で見る１７世紀」）**

**１３世紀**聖トマス　アキナス（1225年頃 - 1274）＜自然＞の概念

　「恩寵は自然を破壊せず、かえってこれを完成させる」

　　アリストテレスの影響　他動詞的　神の存在証明

　　外側から観察され働きかけられる＜自然＞　物体を見る＜知性＞の秩序

　　自然を超えるものへの眼差し　知性の秩序に還元される危険？

**ルネサンス**宇宙を映し出す小宇宙としての人間　類似関係

**１６世紀　＜超自然＞の概念　（初出　1567の教皇勅書 Baiusを巡る神学論争）**\*引用7

**protestantisme**から**トレント公会議　（１５４５−６３）**

**１７世紀へ**見える世界がもはや神のイメージを映し出してはいない

　　　　　　　　中心の欠如　一つの究極の目的、神に向かって統合されていない

　　　　　　　　　　(カルバジオの絵とYves Bonnefoyの美術批評) \*引用8,9

**2. １７世紀の神学論争とキリスト論　（自由意志と恩寵、自然と恩寵の関係）**

**＿トレント公会議　　＜**救いに自由意志と恩寵の両方が必要＞、しかし両者の関係は？

古代からの難しい問い：人間の自由意志と神の恩寵の関係を、そのどちらかを矮小することなく、語ることができるのか？

アウグスチヌス「どちらかを強調すると、もう一つを忘れたかのような印象」\*引用10、

　　もはや印象だけではなく事実上そのように考えられている？

**＿キリスト論に基礎付けられた人間論**創造と原罪の位置づけによって、人間性と神の恩寵の関係が異なって議論される

どちらを出発点にするのか

出発点は、  
イメージ（ロゴスとしてのキリスト）のイメージとして造られたの＜創造＞時Adamとその完成としての＜受肉＞なのか？（人間性とその神的召命の完成としてのキリストの受肉＿教父の見地）

あるいは、  
原罪によって似姿を失ったAdamなのか？

　（原罪の大きさと贖罪の恵みの大きさが比例する＿ポールロワイヤルの見地とパスカル\*引用11 ）

**＿１７世紀には、聖マクシムやラテラン公会議に連なる教父たちが説いていた  
＜神人一体論（le théandrisme）＞は影を潜める。**

**１７世紀の神学論争　（自由意志と恩寵、自然と恩寵の関係）の担い手たちは、**

**教父への回帰を謳ったが、その中心にあるキリスト論、人間論とは、異質の議論**

**「神の似姿に創造された人間」や創造の完成としての「受肉」はもはや考察の基盤となっていない。**\*引用12

**＿ポール・ロワイヤルとジャンセニズム**

　　　創造と受肉による救いではなく、原罪による人間の腐敗と、それを贖う、＜効果の原因＞としての恩寵の力を強調   
　　敵対者と見なされる**モリナ（イエズス会）派は、人間が持つ真の自由意志の役割を強調**

＿＜原罪＞による堕落の悲惨さと、それによって必要とされたキリストの＜贖罪＞の偉大さを強調するポール　ロワイヤル派も、それに反対するモリナ派も、共に、

　＜救い＞の宗教体験のうちにある、人間から来るものと神から来るものを区別して各々の役割を分担させること、そして、＜効果の原因＞を特定しようとする傾向においては共通している。自然と超自然、人間性と神性がこの意味では排他的関係にある。

**メカニックな他動性、受動性　　原因と効果への関心**

（アリストテレスからスコラ哲学へと引き継がれ、１７世紀の機械的世界観によって鋭敏化された）

　モリナ（まことの人間の自由意志）も、ジャンセニウス（神の恩寵の効果性）も、トレント公会議の決定（両者の共存）を認めているが、ジャンセニウスは、原罪以前は前者に決定的な役割を、原罪後の人間（現実の人間）には後者に決定的な役割を付与している。２人とも、神由来のものと人間由来のものを区別して役割分担を分けた上で、その関係をほとんどメカニックとも言える力関係として表現している**。**

（他動詞的、外からの力で動かす原因によって効果、神を他動詞の主語として人間は純粋に受動的）

**→反動と表裏一体の近代的人間論**

**人間から来るものを排除することによって　純粋さを求める傾向**

**あるいは、その反動として、**

**神の恩寵を排除した（神の恩寵から独立した）人間性を強調する近代的人間論へ**

**3　＜自己愛＞l’amour propre と＜神の愛＞ la charité de Dieu、**

**＜自然の愛＞と＜超自然の愛＞の対立**

＿「＜私＞は憎むべきものである」（パスカル）le moi est haïssable \*引用13

　１７世紀の美学であり倫理、しかし、表面的なもので終わらせず、そこから霊性神学の深みへと誘う。しかし　神の愛のために自己愛や、身体や知性を生かしたこの世での業での成功を排除しなければいけないという思い込みがあるのでは？

『パンセ』信仰を持たない他者との対話としての＜護教論＞：共通の土俵として、恩寵を取り除かれた純粋な＜人間性＞を想定しているのでは？

超自然の目的（完成）から独立した人間性（自然）の概念、

「人間全てが持っている幸せへの憧れ」は原罪によって「失ってしまったもの」を示すが、もはや、神を欲求する人間性の現われとは見なされない。

**自己愛＝homo animalis　＝　身体　＝　自然　＝　罪　＝聖性とは相容れないもの**

　人間論はもはやキリスト論（完成された人間でありモデルであるキリスト）の基礎の上にあるのではなく、＜原罪＞により決定的に堕落した最初の人間アダムを出発点としている。  
また、罪と聖性が相入れないという＜価値論＞と、人間を構成する身体や自然を恩寵から排除するという＜存在論的＞人間論を結びつけ混同する危険があるのでは？

魂の経験の中にある、（ただそれだけが救いをもたらす）神由来のものと、  
（誤りでしかない）人間由来のものをどうしても区別する必要性（原因は一つだけ）、

「神を他動詞の主語にしなくては気が済まない」？

神学（理論）と霊性（実践）を貫くこの関心事　→禁欲の見方

（自己犠牲、肉体の犠牲がそのまま救いに比例するかのように観想につながる？）

現代の＜ゼロサム主義＞との関連**？**

**4　＃　image→figure→signa　の考察 （説明省略、要点のみ）**

＿3つとも、＜見えない永遠の現実＞と対比され、それを表す（映し出す、示す）＜見える印＞

　＿（本物の）モデルと（偽りの）コピー

**＿表徴Adam, figure de celui qui devait venir. (Rm. 5.12)**

**後から来るものによって完成される**

**（前、後、見えるものと見えないものの間に、類似、対立、不完全から完全への移行）**

**全ての人間の罪（アダム）と恵み（キリスト）における連帯**

**しかし、並立関係ではない。「神の賜物は、アダムの罪とは比較にならない。  
「罪が増えたところには、恵みはさらに一層豊かになりました。」（１４、２０）**

　＿imageとfigureはそれ自体に内実と意味があり、より高次の現実にその不完全さを完成されるが、signaは純粋に「外側に指し示す」道具であり、それ自体は虚しい。

＿アウグスチヌスはsigna/res （印/それが示す現実）とuti/frui（何かのために役立てる/それ自体を目的として享受する、愛する）を結びつけて、聖書解釈（旧約/新約、字義的な意味/霊的な意味）と究極な目的（telos）（：神の愛）へと方向付ける価値論（axiologie）を打ち立てた。

＿パスカルにおける表徴（figure）と奇跡（signe印としてのmiracle）の持つ両義性の考察

（ヘブライ的人間観imageから、アウグスチヌスが取り入れたプラトン的解釈学signa/resへの移行が、科学革命によって見える物質世界を見えない抽象的理性が支配することに伴って強められた）。

（見える物質世界に対する、見えない知的プラトン的精神性（le spirituel :esprit-intelligence）（物質と対立し、外から支配する知性）と、見えない聖霊の業（le spirituel : esprit-pneuma）（外から来て人間を内から、心身丸ごと、変容する神のいのちとしての恩寵）の混同と、その結果としての、知的権力の一元的支配　（近代）

神の似姿としての人間の創造とそれを完成させるキリスト(image-figure)が、現世ではないイデアに価値を置くプラトン的解釈論（signa-figure）に取って代わられた？体や現世の軽視と、霊性（聖霊の命の心身における内在的超越的現実化）が知的、道徳的な解釈に取って代わられた。そこで置き去りにされたのは、霊性の中に引き受けられた体や現世の積極的な意味ばかりではなく、人を丸ごと生かす命としての聖霊の内在的超越的働きではなかったか**？**

**5　二元論の新たな対立と混同**

＿

−魂と体、身心の関係と　善悪、自然と超自然の対立が　しばし混同される事態

—見えないもの超越と優位が、物質を支配する知性にとって代わられた。またそこに、道徳的、宗教的善悪、自然と超自然を上乗せしてしまった。

—また、価値論（何を至上善とするか）と人間論（人間を構成する要素）の混同から、体（ :悪）と精神（ :善）、自然（：悪）と超自然（：善）とするかその反動として正反対を主張するかという短絡的ビジョンになった。

L’homme n’est ni ange ni bête. Et la Malheur veut que celui qui fait ange fait la bête. \*引用14

その結果、心身を統合する内在的超越的秩序が失われ、存在の分裂（頭で良いと思ったことを身体で実現できない）と交わりの喪失（愛の欠如）からどう回復するかという課題だけが残った**。**

**6　連続した＜段階＞から　無限の距離で隔てられた＜異なった秩序＞へ**

**＿パスカルの「三つの秩序」(S.339 B.793 )＿**\*引用 別紙

**「近代の科学的な見方の支配による、世界のイメージ性の喪失」「世界の全体性との繫りの喪失」（中村雄二郎）**\*引用15

**創造されたもの、自然、目に見えるものが、神の栄光を映し出すことは不可能であり、全てが　signa-res関係をモデルとする表徴（外的な類似関係と対立による超越）であり、内在的に刻み込まれたimageとその完成はない。**

**神（超自然の恩寵）を排除した、独立した、純粋な自然の概念。**

**神学者　de Lubacのいう　＜恩寵の外在要因主義＞(extrinsétisme)の問題に** \*引用16

パスカルの場合は？　　**＜恩寵の外在要因主義＞は当てはまるのだろうか？**

確かに、上記の近代的な自然観、人間観が、少なくてもある程度まで見られるが、対立分離のギリギリの接点と別れ目を示しているのでは？

「三つの秩序」別紙引用「３つの秩序」 〔以下は説明省略〕

　　　人間のヴィジョンとしてのパスカル＜三つの秩序 : 身体(corps)、知性(esprit)、愛(charité)

「一致に還元されない多は混乱であり、多に依らない一致は専制支配(la tyrannie)である」（S.501）

　　　　「専制とは自らの秩序の外に普遍的に支配すること」（S. 92, B.332）

　　　　　異なった秩序の共存する多元性の中で、どこに根本的な対立を見るか、どの次元に一致をみるか

　\*　パスカルの人間観 : ギリシャ的ヴィジョンと、ヘブライ的、聖書的ヴィジョンのコンビネーション

　　　　−　ギリシャ的人間観　　人間を、肉体、知性、魂などの異なった部分で構成されていると見る

　　　　　　　　　　または、実在は見えないイデアにあるとするプラトン的象徴のヴィジョン

* ヘブライ的、聖書的人間観　丸ごとの人間を、身体、知性、霊の異なった視点から見る。

　　　　または、事実（アダム）が事実（キリスト）を指し示す表徴（figure）

*聖パウロによる＜肉＞vs＜霊＞、＜文字＞vs＜霊＞の対立*は、

　　　　　　　＜人間まるごとが、神の霊（プネウマ）に開かれ、生かされる生き方（霊）＞vs

　　　＜人間が自己保存的、自己中心的生き方によって神の霊に閉ざされた生き方（肉）（文字）の対立＞

**\* パスカルの３つの秩序の特徴**

−「視点としての方法論」(Emile Boutroux)「常に人間まるごとに向かっていく」

−　人間まるごとの生き方を、価値選択、目的により３つの異なった視点で見ると同時に、

表徴(signa)と実在(res)という二元性を使ったアナロジーによって、

人間の究極の目的である超自然の愛の秩序に目をむけさせる。

＜spirituel＞という語の二義性（esprit-intelligenceとesprit-pneuma）をバネに、知性と愛を隔てる＜無限に無限の距離＞の飛躍を示す。

「すべて愛にまで至らないものは表徴である」（パンセ）別紙引用「３つの秩序」

　　愛 :la charité : 聖霊l’Esprit Saint : 恩寵la grâce

　聖パウロ 「私たちに与えられた聖霊によって、神の愛(Caritas Dei)が私たちの心に注がれた」

　＝　アウグスチヌス的　：プラトン主義でありながら、キリスト的聖霊に開かれたヴィジョン

〔以上まで説明省略〕

**パスカルの「３つの秩序」の断章 :**

人間の構成要素である身体と精神と愛がどのように連関しているか、ではなく、

価値論（axiologie）と解釈学(herméneutique)に焦点を当てている。

＜物質世界から知性、そして究極の神の愛まで、まなざしを上昇させるダイナミズム＞に貫かれているが、＜表象**figureの概念＞には、＜感覚で捉らえる世界の空虚さと恩寵の力とその効果＞が印象に残る。**

＿見える世界、自然はそのままでは神を映し出していない。神の証明にはならない。  
　　　　そうなる場合は、神が光を与えた人のみ　\*引用17

＿「全てのものは、神を隠すヴェール」である。

　　恩寵を生きるキリスト教徒は、表徴と現実の両方が与えられている。全てを通して（通り抜けて）（そこに止まらずに）神を求めるべきである。\*引用18

＿秩序（ordre）は、目的（王、支配者）によってそれぞれの世界を支配する力（原理）の秩序としての法であり、有機的なつながりを意味していない。

＿**figure :表すものとあらわされるものとの関係が、対立を含む外的な類似関係であり、身に刻まれ完成されていく＜似姿＞としての親密なimageではない。**

**＿それ自体実体のない空虚な（空洞化された）figure : 見えない現実（res）を指し示す signa,究極的な目的のみを享受（frui）するために、手段として役立てる（uti）ことしかできないもの。**

**＿デカルト的な＜物質と知性の対立＞と、後者の前者に対する優位、制御関係：同時代人の出発点として認める。**

**＿しかし、そこから出発し、さらなる超越を示すことによって、知性の優位と支配が＜傲慢＞となって、神と「超自然の愛（Caritas）」を排除する＜偶像＞となる危険をはっきり指摘している。**

**物質世界と身体を制御する知性の秩序が**、＜**超越の代理品erzats＞となる可能性を警告。  
　　　　\* ＜穴＞を代用品で埋めたくなる。？**

**＿単なる恩寵の外因主義（extrinsétisme）に陥らない解釈学、包含による止揚（dépassement par intégration）、**\*引用19

**＿心身変容を実現する聖霊の神学**\*引用20

　　他の断章を読み、視点を補っていくことで、パスカルが身体、精神、超自然の愛の間の連関をどう考えていたかがわかり、神の恩寵が人間の全人格的一致と交わりを実現するものであり、見える身体、世界が、創造から恩寵を経て終末に至るダイナミックなヴィジョンのうちに、位置付けられていることがわかる。**引用別紙「３つの秩序」**

**＿有機的なものの不在、恩寵を除かれた人間性の存在の想定が疑われる、  
しかしダイナミックな命の源としての聖霊と超自然の事実性がはっきり打ち出されている**

**７　１７世紀から現代の問題へ**

科学技術の誕生を見た１７世紀フランス  
　＜デカルト主義＞　魔術的世界観からの解放、しかしその後、人々は、  
命あるもの（人間、自然）を＜モノ＞として＜使う＞ようになった。

＜物質と精神の二元論的対立＞と＜還元主義＞の始まり

１７世紀後半に＜自然＞の観念がますます静的で固定化されたものになった。 \*引用21

超越のすり替え　霊的なもの（spirituel）が知的なもの（intellectuel）に還元され、知性の一元支配　外的支配はあっても超越のない自然主義  
１８世紀啓蒙主義哲学　＜個人の自由＞の獲得、しかしその後、知的な普遍性に物質を従わせる  
理性至上主義の弊害と、絆を失った＜個人＞の　identitiyの喪失

産業革命を経て資本主義の発展に伴い、常に「もっともっと」　　ー　　効率と量産、＜消費主義＞の呪縛のもと、＜限りある資源＞と＜限りない物欲＞の間での開発と環境問題に直面している

現状　システムの行き詰まりと崩壊の危険

　　　→*新たなる価値観の創造*　　　量より質へ　二元性を超える新たなパラディグムの必要性

ペギーの例から２０世紀と現代を考える

1. **ペギーの神秘ビジョン　＜創造＞と＜受肉＞**

＿＜穴＞（鎌田先生と鶴岡先生）について \*引用22

＿シャルル・ペギー　（１８７　−１９１４）

：＜創造の夜＞を歌う散文詩で、持続と非連続、神秘の夜と日常の昼を分かち結ぶ輪郭を、識閾のイメージを使って表現

＿より広く根源的な次元に下っていくことで＜包越＞してゆく、「３つの秩序（身体、精神、超自然の愛）」のビジョン（２０１４年　回研究会「ペギーとベルクソン」）

1. **＜受肉＞の発見**

**＿境界（鎌田先生、「二つの世界を同時に参入しつつ離脱するような両義的な位置に立つこと、越境者としての「超越」の技法」）**\*引用23

**＿両義的な位置に立つペギー**

**＿「表徴と観念が未だ区別されずにいるこの深みに降下」「全てが交差する」「受肉の軸」に身を置く**\*引用24

＿**神学者フォン　バルタザール、美学と倫理の一致**\*引用25

**＿1908年ごろ**キリストの＜受肉せる魂＞(l’âme charnelle)との個人的実存的出会い**「病の善用」と「マタイによる受難」の黙想。ゲッセマニ　人間としての意思と神としての意思の結合による人間の救い** \*引用26

〔以下は説明省略〕

**（　 若くして＜戦闘的社会主義者＞であったペギーの晩年における２つの 神秘体験**

１９０８年頃から、カトリック信仰を表明。しかし、絶望と死の誘惑をともなう苦しみは減らなかった。  
　　キリスト教 : 証明(preuve)はなく、試練（épreuve）。  
１９０８年から１９０９年にかけて（１）、そして１９１１年に再び（２）、２回の絶望的試練と恵みの体験。  
　　−　（１）受肉したキリストと恩寵の交わりの経験　１９０８年から１９０９年 \*  
　　　　　　親友の死、挫折、そして病気、自らの弱さと悲惨の体験の最中に、ペギーはふたたびパスカルの「病気の善用をもとめる祈り」を読み、そこから導かれて、マタイ福音書のキリストの受難の物語を読む。キリストの＜受肉せる魂＞(l’âme charnelle)との個人的実存的出会い、それが同時に、「矛盾の神秘」によって、三位一体のうちにすべての人と交わる＜諸聖人の交わり＞(la communion des saints)に入れられた経験。  
　　　＜悲惨のなかの偉大＞　超越と内在の恩寵体験でもあり、時間と永遠、身体と魂をむすぶ中心点の発見。　  
　−　（２）おとめマリアのヴィジョンと完き委託 (abandon) １９１１年前後  
　　　　　　再び挫折と病気の苦しみの中に陥る。８歳の息子ピエールがチフスにかかり命の危機にみまわれたことをきっかけに、シャルトルの巡礼を誓い、その後巡礼の歩みの中で＜完き委託＞の経験をする。  
　　　　　この時期の散文詩には、子供たちを聖母マリアに奉献した時に垣間見た、「肉なるものでありながら清い」「小さきものでもあるからこそ偉大な」「若い母」おとめマリアのヴィジョンから、世界のすみずみまで浸みわたる創造主の輝き、父なる神の親心、子供の信頼と委託、恩寵の働く＜夜＞のヴィジョンなど、淡々とした日常生活のなかでの神秘体験が描かれている。 ）

〔以上まで説明省略〕

**２　ペギーの「３つの秩序」解釈の特徴**

**異なった秩序間の関係　　（図を参照）**

：両者の間にはっきりした次元の違いがあるが、高次元の秩序である実在（le réel）は、低次元の秩序である表徴（la figure）を破壊することなく、切り離すことなく、一致のうちに内包するという特徴がある。そしてこの「深く内的で全体的根源的な」実在と、より表面的外的不完全な表徴の関係は、常に「単一の総体」と「分断された肢体」の関係であり、また「支え養う生の根源」と「支え養われる寄生物」の関係として現れる。

→「夜」と「昼」の関係、「持続」と「断続」、「海」と「島々」、「私的なもの」と「公的なもの」、「秩序」と「整理立て」、「作品の源泉」と「作品の解釈」、「霊」と「文字」、「愛、行為」と「知識」などの二項関係にある類比関係

　　　　　　　　　　拙論、「ペギーにおける『夜』—表象と形而上学—」（１９９６）

そして**この人間丸ごとを＜内包する超越＞**は、抽象的＜精神的な上昇＞によってではなく、見えるものと見えないもの、具体的なものと概念が未だ分かれていない、有機的に実存的に生きられた＜実在の深みへの降下＞によって得られる。そしてそこからの湧出が詩学であり美学となる。

パスカルが存在の一致（l’unité de l’être）—あるいは純一であること（la simplicité—と他者とのより完全な交わり（la communion）への希求を、自己超越によって可能としたのに対して、ペギーはその同じ希求の実現を内在に、自らの存在の底からの垂直的に湧出に見出した。

**超越から内在へ、内在から超越に、＜包越＞**

**ペギーは、まさに、人となった神キリストの＜受肉＞の再発見によって、実存的、哲学的、神学的、文学的imageの再生を実現した。**

**「超自然はそれ自体＜肉なるもの＞」**

**神の国への身心の＜包越＞**

**高次元の秩序である実在が、低次元の秩序である表徴を一致のうちに内包するという特徴**

〜Maurice Blondelの行為（Action、１８９３）との類似　外因主義の批判　引用別紙　拙論

ペギーを介して、  
第二ヴァチカン公会議に影響を与えた Henri de Lubac, Hans Urs von Balthasarなどの神学者へ

〜ベルクソンの＜持続＞とその周辺のパスカルの読者　Boutroux, Le Roy, Chevalierから

三木清（『パスカルにおける人間の研究』（１９２６）へ　  
「高次のものは低次のものを綜合する一層広くして深き見方である」\*引用27

**\* ペギーの「３つの秩序」解釈の特徴**

表徴（signa）が指し示す resはイデアではなく、可視世界を根底で支えて養っている実在であり、交わり（communion）であり、その源泉から「思想とイマージュが同じ豊かさで湧出する」。

＜二つの軸の交わる中心点＞は、キリストの受肉の神秘にあり、詩人はそこに身をおいて創作活動をする。＜受肉の詩学＞（科学はメタファーであるが、ペギーの詩作はメタファーではない）。

〔以下は説明省略〕

**\* ペギーの「３つの秩序」のヴィジョン　（図を参照）**

１９００年、１９０５年、１９０７年の３回にわたって全文引用ののち考察

　　＜３つの秩序＞の引用と考察１　１９００年

- パスカルの第三の＜超自然の愛＞の秩序を社会主義者の＜連帯＞の行動の秩序と置き換え、

「より深く」「より内的で」「より全体的で」「より本源的」な秩序と特徴づけている　 \*引用27

−　コンテクスト「流感について（De la grippe）」＜病の善用＞「死せるものの視点から世界を見る」

　　民衆大学　＜科学＞と＜連帯の実践＞との間に横たわる溝

\* 一致と交わりは、知的レベルにあらず、身体と知性をより＜深く＞＜内側で＞＜より統合的な＞レベルで内包する、第三の秩序にある。愛／連帯の実践の行動によって生きられたレベルに降りる必要。

そこでは、無学の一市民と天才が同じ源泉から来る直感的な動きで結ばれている。

＜３つの秩序＞の引用と考察２　１９０５年　有機的な垂直のつながり、記憶の発見、

　　水平方向に線を引く「地理的」知識と、垂直方向に深みのつながりを見る「地学的」知識、

　　下位の層を内包する３重の輪　\*引用28

＜３つの秩序＞の引用と考察３　１９０７年　＜心の秩序＞VS＜知性の秩序＞、

現実を掴む直感と、メタファーとしての科学科学的進歩の一元論批判　＜霊的＞な次元を覆い隠す

　　野望をもった知的＜専制支配＞ 、＜傲慢＞の危険　\*引用29　新たな偶像としての近代思考

**\* ペギーによる＜パスカルの３つの秩序＞の図　参照**

**第三の愛の秩序**のレベルは、知性と身体を内包し、深い海底のように無限にひらかれ、水上で孤島のようにばらばらに見えていたものがすべて根底でつながっている。実在、深い記憶の海？、見えるものと見えないもの、自然と超自然が交わり一致しているこの深みが、恩寵が働く癒しの場。詩人はそこに決然と位置して創作し、思想とイマージュが同時に湧出する源泉となる。

直感によって捉えられる純粋持続の場、今、ここの、自由ないのちの生成の場、

この存在の一致と深みでの交わりをみる事を可能とする垂直のまなざしが＜心の秩序＞

それに対して、いのちの垂直の根付きを断ち切り、水平方向にすべてを還元してしまう科学的まなざしの専制支配を批判

　　＜神秘＞の動きと＜政治＞の動き　→　ペギーにとっての根本対立 \*引用30

初期のベルクソン哲学がペギーに提供した３つのポイント（「内的で有機的な持続」、「現在の自由」、実在をつかむ「直感」 : 近代科学の世界観に欠けていた３つの視点）。

これをパスカルの「３つの秩序」に応用することで、ペギーは固定化され枯渇した心身二元論を超えて、本源的な性格をもつ＜実在＞における心身の一致を見いだした。

ベルクソンが＜内的生命の源泉＞をペギーに示したとするならば、パスカルは「３つの秩序」によって、＜身体＞と＜知性＞の異なった次元の上に、＜無限大に無限の距離で隔てられた＞より広く深く根源的な、第三の超自然の（霊的な／恩寵に生かされる）次元を導入した。そこには、キリストの地上的（身体的、知的）小ささ、貧しさと愛における偉大さという、二律背反の神秘的ヴィジョンがある。ペギーはこのキリストの神秘のうちに、＜肉なるもの＞と＜霊なるもの＞の＜神秘的な連携＞を見いだした。

**＜人となった神＞であるキリストとの出会いと交わり（コミュニオン）** : 身体のまなざしからも知性のまなざしからも隠された、人間の＜悲惨の中の偉大＞の発見であり、キリストにおける＜受肉＞（Incarnation）、歴史と永遠、罪と恩寵、＜肉なるもの＞と＜霊なるもの＞をひとつにする中心点の発見。この神的生命の湧き出る 実在の中心点は、抽象的な真理でも単に内在する＜生命の躍動＞でもなく、内在と超越が出会い、永遠と時間が出会う、キリストの受肉と贖罪という＜歴史的＞であり同時に＜超自然的＞である＜事実＞。  
　パスカルの神、「アブラハムの神、イサクとヤコブの神、哲学者の神にあらず。。。。」（メモリアル）

科学的真理の＜一元的＞＜進歩主義＞に背を向け、ペギーは、人となったキリストの受肉のうちに示された、人間の＜悲惨の中の偉大＞と＜希望の神秘＞の中に現実の中心点を見いだしていく。　　　　〔以上まで説明省略〕

**３)「夜」のイマージュ**

　　　　\*引用32 別紙（ペギーの散文詩の翻訳）を参照

　　優れて＜実在＞を表象するイマージュ。

　　見えるものと見えないものを結ぶliminalなビジョン、二律背反をむすぶ神秘、

　　見えるイマージュから見えない実在への動き、＜過ぎ超し＞の動き、　  
　　ペギーの思想的、宗教的、文学的　探索のすべての結実

　　恩寵と癒しの場　存在の一致と深みでの交わり　NDE ヒーリングを含めた宗教間対話に開かれた次元

**＜創造＞の夜**

**「私はあなたを最初に創造したのだ」未生、未分の現実  
＜始源＞の時と、＜かの時＞と融合する「永遠の今」の時間が、「一つの繋がった夜」として描かれている。「祈りながら眠りに落ちる子供ほど美しいものはこの世にない」「子供達が落ち込んでいくのはそこです」**\*引用33

**神話的時間、**「淵」(鎌田先生)と「穴」（鶴岡先生）\*引用34 引用　　別紙参照

**４）受肉の詩学　La poétique de l’Incarnation**

　　−　ペギーの文体は、脱線、断絶、矛盾、繰り返しが多くて難解。直線的論理的理解を拒み、読者を垂直的スパイラルの動きの中に入れる。多種多様なイメージの重なりを通して、収束によって常に指し示されている深みの実在＜中心点＞が見えてくる、深みの垂直の秩序。

　　　\*引用35

**ペギーの詩学 :** 現実に生きられた深みの次元に、直感によって＜中心点＞に下り、その源泉から「同じ豊かさで」＜概念＞と＜イマージュ＞が湧き出る。＜肉なるもの＞と＜霊なるもの＞の二重軸。\*引用36

* 単純な直感の行為によって、実在の中心点に身を置き、そこから思想と文学が表裏一体となったさまざまなイマージュを生れ出る。
* つねにすべてを統合する一点を示し続けるパスカルの＜心の秩序＞であり、  
  ベルクソン哲学の＜知的努力＞を詩作において実践しているといえる。  
  　（１９１１年４月のベルクソンの講演「哲学的直感」\*引用37）

**５　希望、神のいのちのダイナミズム**

* **希望の神秘　—聖霊の神学へ**
* ＜創造＞と＜持続＞、＜生成しつつある創造＞
* ベルクソン ＜純粋記憶＞と記憶の中にある＜習慣による繰り返し＞を区別。＜純粋記憶＞と「新しく、「予見不可能な」＜現在＞が持続を構成している。「現在の瞬間の硬直化」こそが近代知性の枯渇の原因であり、「キリスト教の恩寵のいのちの働き」に最も反対するもの。\*引用38  
  　　知的な安寧さのために、自由で豊かなはずの現在を、過去に固定されたものと取り違えている。キリスト教的な態度は、その逆で、永遠の今のうちに、貧しくあり恩寵への開きに委ねる。
* 希望　霊的な貧しさと恩寵の湧出
* 謙虚さ（道徳的な貧しさ）と希望（記憶の貧しさ）が恩寵への開きをつくる。
* 引用　「恵みに＜濡れる＞ことのない道徳者」自らを罪人と認める人には恩寵への開きがある。
* 「若い子供である希望」は記憶の服を脱いで恩寵を受け取る命の泉。\*引用39
* 十字架の聖ヨハネ　霊的貧しさと希望　希望は記憶に枝づけされている。「所有」と反するもの。霊的死とは？
* ＜若い聖性＞　ジャンヌ・ダルク、＜記憶ゼロ＞　能動的な修行ではなく、恩寵による受動的な変容を生きる。 \*引用40
* 霊的な小ささ、貧しさは恩寵の受容能力を大きくするものである。恩寵は、身体、歴史、時間の軽蔑の上に成り立つのではなく、現実の人間性の尊厳と、存在と行為の一致によって実現する真の受肉のうちに開花する。
* 修行は、身体や世の中の歴史参加自体を否定するのではなく、身体や知性、特に記憶の中にある機械的繰り返しをともなう習慣を脱ぎ捨てて、今、ここでの、恩寵のいのちの自由な開花をめざすもの
* 恩寵の湧出　\*引用41（ベルクソン哲学）

６　ペギーの神学的美学

* 超越と内在、神学と典礼、美学と倫理、信仰と社会日常生活におけるengagement\*引用42

　戦闘的社会主義者であったペギーは、カトリックに＜回心した＞(converti)のか？   
 ＜唯一の回心＞は、社会主義者としての回心で、最後まで＜ひとつのまっすぐの道＞を歩んで来たのだと宣言。  
ドレフュス事件を通して＜連帯＞として現実の行動で生きたものは、キリスト者にとっての愛徳(la charité)に他ならなかった。論争家として、一貫して反対し批判し続けて来たのは、知識人の内部にも、キリスト教徒の内部にも共に存在していた、＜身体＞＜歴史＞＜時間＞＜肉なるもの＞を軽視し、恣意的な知的一致を優位にして、いのちの根を切り取る＜近代的知性の専制支配＞、すなわちすべてを＜政治＞におとしめる知識人の傲慢であった。  
　　\*引用43

**終わりに　　　holisticの行き先**

＜肉なるもの＞のassumption

＜包越＞と終末に向かうダイナミックなヴィジョンにおける＜神の国＞

　　　＜受肉＞と＜聖霊＞の神学

　　　　　　身体、典礼、修練の意味と方法

　　　　　　神の国の建設　肉と霊が、天と地が、時間と永遠が結ばれる、人間と神の共同創造

　　　祖国は天に　　しかし根を持つこと ＜永遠＞と＜歴史＞＜肉的＞で＜霊的＞な根を

　　　　　　　　　　　　　　　　　　（人となった神であるキリスト）

« Car le surnaturel est lui-même charnel ».　(超自然は　それ自体肉なるものであるのだから)

　　　　　Car le surnaturel est lui-même charnel

Et l’arbre de la grâce est raciné profond

Et plonge dans le sol et cherche jusqu’au fond

Et l’arbre de la race est lui-même éternel

なぜなら超自然はそれ自体受肉せるもの

　　　そして恩寵の樹は深く根を張り

　　　地面に飛び入り根底にまで達する

　　　そして種族の樹はそれ自体永遠であるのだから

　　　　　　　Charles Péguy, *Eve*, O.P., p. 10

**Bibliography,**

　Saint Bernard de Claivaux, *Œuvres Compètes de saint Bernard,* éd.Charpentier, Paris, 1865-1868.

Blaise Pascal, *Pensées,* éd. Sellier, Classique Garnier, Bordas, Paris, 1991.

Charles Péguy, *Œuvres poétiques complètes,* Gallimard, Paris, 1975. (OPC)

Charles Péguy, *Œuvres complètes en prose III,* Gallimard, Paris, 1992 (OCPIII)

Simon Icard,*Le Mystère théandrique, Action de Dieu, action de l’homme dans l’oeuvre du salut*, Honoré Champion, Paris, 2014.

Simon Icard,*Port-Royal et saint Bernard de Claivaux*, Champion, Paris, 2010.

Simon Icard, *Le Discernement spirituel au XVIIe siècle*, Paris, Nolin, 2011.

Marie-Joseph Le Guillou, *Le Mystère du Père. Foi des apôtres, gnoses actuelles,* Paris, Fayard, 1973.

Henri de Lubac, *Augustinisme et théologie moderne*, Cerf, Paris 2008 (1e éd. 1965)

Henri de Lubac, *Surnaturel*, Déclée de Brouwer, Paris, 1991.

Hans Urs von Balthasar, *La Gloire et la Croix*, t.2-2, De Jean de la Croix à Péguy, Cerf-DDB, Paris, 1972.

Etienne Gilson, *La théologie mystique de saint Bernard*, Paris, Vrin, 1986.

Etienne Gilson, *Saint Bernard. Un itinéraire de retour à Dieu*, Paris, Cerf,1964.

Marie-Madeleine Davy, *Bernard de Clarvaux,* Paris, Albin Michel, 2001 (1990).

Julie Higaki, Péguy et Pascal –les trois ordres et l’ordre du cœur, Centre international Blaise Pascal, Clermont Ferrand, 2005.

Julie Higaki, « Pascal et saint Paul », *Pascal, auteur spirituel,* Honoré Champion, Paris, 2006.

Julie Higaki, « l’ordre de la charité et les images du réel chez Péguy », *Cahier de l’association international des études françaises,*n.49, Paris, 1997.

Julie Higaki, « Péguy et Pascal : la métamorphose de l’augustinisme (1) Ordre et Figure», *Revue des Etudes Augustiniennes et Patristiques*, vol.61 (2) , Paris, 2015.

Julie Higaki, «“La Lettre et l’Esprit” dans les deux dernières *Notes* de Péguy:

de Pascal vers la symphonie des voix », *Voix de Péguy,* *acte du colloque de Cerisy,* éd. Jérôme Riger, Garnier, Paris, 2015, p.327-343.

**日本語　翻訳**

　『希望の賛歌』、猿渡重達訳、中央出版社、１９７８．

　『ジャンヌダルク愛の秘儀』、岳野慶作訳、中央出版社、１９８４．

　　　（『キリスト教文学の世界３　ルナール、ペギー、クローデル』、島朝夫訳「ジャンヌダルクの愛の神秘」、主婦の友社、１９７８）

　『歴史との対話』、山崎庸一郎訳、中央出版社、１９７７．

　『悲惨と嘆願』、長戸路信行、西田俊明、高井道夫訳、中央出版社、１９７９．

**日本語　研究**

　ポール・リーチ　『人間を問う作家たち』、みすず書房、１９７１（「シャルル・ペギーの精神的道程」）

　岳野慶作　『悲劇的希望の予言者シャルル・ペギー』、中央出版社、１９８６

　田辺保　『光は暗きに照る』、日本キリスト教団出版局、１９７８（「麦畑のかなたのカテドラル」）

　檜垣樹理　「シャルル・ペギーにおける〈福音的小ささ〉の発見」、『人間学紀要　２１』、上智大学人間学会、１９９１，ｐ.２４−５７.

　檜垣樹理　「ペギーにおける『夜』−表象と形而上学−」、『仏語仏文学研究』、東京大学仏語仏文学研究会、１４，１９９６，p.57-113.